

19991222

絵本学会 NEWS No.8

発行：絵本学会

発行日：1999年12月22日

編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学芸術文化学科今井研究室内

TEL : 0423-42-6091 FAX : 0423-42-5173

<http://vcd.musabi.ac.jp/ehongaku/homepage.html>

絵本フォーラム '99 東京大会報告

絵本フォーラム in 関西 Part 1 報告

シリーズ絵本美術館

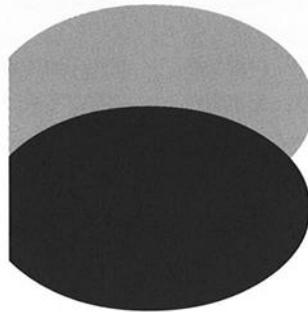
アトリエ訪問

会員活動報告

伝言板

インフォメーション 絵本関係展覧会・イベント

事務局からのお知らせ



絵本学会

『絵本フォーラム '99 東京大会』報告

生田 美秋

「絵本フォーラム '99」が、「絵本を持って集まろう！『あなたにとって“絵本の魅力”とは？』」のテーマのもとに7月18日(日)東京の世田谷文学館で開催されました。昨年同様、定員一杯の熱心な参加者によって活発な論議が行われました。

◆ 第1部 問題提起

1. 「絵本ファンの立場から」 江國香織氏（作家）

絵本についてのエッセイ集『絵本を抱えて部屋のすみへ』や絵本の翻訳も多い作家の江國さん。この日は、最近気に入っている井口真吾著『乙ちゃん』、ブルース・イングマン著『マーサのいぬまに』、ドラ・ロアラング著『写真集ザ・アメリカ カントリーウーマン』、ビアトリクス・ポター著、ピーター・ラビットシリーズ『モペットちゃんのおはなし』の四冊の絵本をお持ちになり、それぞれの魅力を絵ストーリーの両面から具体的にお話いただきました。また、幼い頃読んだ『泣いた赤おに』を大きくなってあらためて読んで、ずっと風景だけだと思っていた場面に鬼が描かれて驚いたこと。これは、幼い頃は自分が絵本の主人公の赤鬼になりきっていたために気付かなかったケース。幼い頃好きではなかった田島征三著の『ちからたろう』を学生時代アルバイト先の絵本店で改めて読んで、その魅力に気付いた。といったエピソードが披露されました。江國さんは絵本の魅力を①単純に絵本という形が好き②ページを開くと、自然にその作品世界が広がる③繰り返し読める④きれいで、個人的には、気持ちのよい絵本が好き⑤ストーリーが短く、絵本でしかできないことが多いと、要約されました。

2. 「子どもとアートの立場から」 結城昌子(アートディレクター)

『ゴッホの絵本・うずまきぐるぐる』に始まる「小学館 アートブッ

ク」(既刊10巻)のほか、「見て、作って、遊んでアートと友だちになろう！」のテーマで講演、ワークショップ、絵画展の審査員、NHK教育テレビの監修などでも活躍中の結城さん。ご自身、アートを追っかけていて絵本にたどり着いたという話題のシリーズ「小学館 アートブック」を中心にお話しいただきました。『ゴッホの絵本』には、「うずまきぐるぐる」のサブタイトルが付いています。小さい頃から、ゴッホはうずまきぐるぐるの画家だと思っていた結城さん。この先入観のない幼い頃の思いを大切に、最初の画家との出会いと感動にこだわったシリーズです。「泰西名画を切り刻む、暴挙」(結城談)には、次々に発生する著作権のクリアが大変でしたが、よい絵には多様な遊びや見方を許す豊かさがあり、自分で作りたいものにこだわって絵本化したとの発言に、結城さんのシリーズへの自信がうかがえました。絵も、絵本も一生の友達、一生の財産を得るつもりで、友達と出会ったように出会って欲しい。最初から絵本のバックグラウンドを知って好きになると言うのではなく、好きという思いを大切にし、何で好きなのか、その理由や背景の知識は後で学んでもいい。自分で発見した絵本の面白さ、魅力は一生残る。そういう出会いを皆さんにして欲しいと、熱のこもった問題提起が行われました。「アートというフィールドの面白さを、絵本という身近で魅力的な存在を通して伝えよう」と試みる結城さん。絵本という表現メディアの可能性をますます拡大する興味深い取り組みに参加者の注目が集まりました。

3. 「編集者、デザイナーの立場から」 小野明(絵本編集者・装幀家)

小野さんは、250冊以上の絵本・児童書の企画、編集、デザインに関わり、絵本作家を目指す人たちのためのワークショップを東京と四日市で主宰されています。最近刊行され話題を呼んだ別冊太陽『100人が感動した100冊の本』(平凡社)では、絵本のセレクト、ストーリー、見どころ解説の全てを一人で担当されました。長新太著『ちへいせんのみえるとこ』を偶然書店で見たのが小野さん



江國



結城



小野

左から、江國・結城・小野氏

と絵本の出会いでした。「衝撃的でした。二十四歳の僕が、小説や映画や絵と同じように感動できる絵本のあることに気付き、絵本の世界に入ることになった」といいます。絵本のデザイナーとして、作家の意図する表現世界を本の形にまとめるための触媒の役割が果たせればいいと、デザイナー色を強く押し出すことに消極的な小野さん。この日はそんな小野さんが作者を以前からよく知っていて、企画の最初から関わっていたためあえてデザインしたという荒井良二著『はじまりはじまり』を例に、表紙のデザイン、見返しのねらい、紙質、書体、本文や表紙の色へのこだわりについて具体的な説明が行われました。また、新人作家が最初に絵本を出す場合、「子どもに分からない」という理由で直しを求められる場合があること、この言葉が有無を言わせない編集者の切り札になっているケースが指摘されました。『ちへいせんのみえるとこ』のビリケン出版からの復刊を例に、今復刊がとても重要であることなど、現役の編集者・デザイナーならではの発言が参加者の興味をかきたてました。

第2部 談話サロン（詳しくは後の報告をお読み下さい）

第3部 報告・座談会

問題提起をしていただいた三氏に再び壇上に上がっていただき、第一部、第二部をふまえての座談会と会場からの質問に答えていただきました。座談会では、自分の楽しみとしてではなく子どもの絵本を選ぶ際の基準をどう考えるかについて、「自分が好きということが大切、子どもはどんなものでも大丈夫じゃないか」(江國)、「親が好きでなければ子どもとのコミュニケーションは成り立たない」(小野、結城)。第一部での小野氏の発言、作家に依頼した時点で作品の出来が決まっているとしたら、編集者の役割はとの疑問には、「上がってきた作品を直すというのではなく、自分の姿勢として出来上がりに自信の持てるお願いをしたい」という趣旨。依頼から上がりまで1年間をみている」(小野)、その後、「皆さん、既成の言葉で視界を曇らせていない、裸の眼で絵本を見ている印象を受けた」(江國)、「絵本が好きな人って、なんていい人ばかりなんだろうと思いました」(結城)、「さまざまな意見や感想が聞けフォーラムに参加して自分が一番得をした」(小野)といった第二部への参加の感想をお聞きし、質疑応答に移りました。

絵本に興味を持って描き始めたが、難しくて、傑作と呼ばれている絵本を読んだら真似になってしましますます描けなくなつたという大学でイラストを専攻する学生の質問には、「だれにでも分かる、みんなが感動する作品を書こうと思わないで、自分はあの人のために書くというように対象をしづぼつたら」(結城)、「絵本の絵と文の関係は独得、最初は単なるさし絵になります」(江國)など、長さんの「ちへい

せんのみえるとこ」の文は全て「でました」のみです。絵がないと内容が全く分からない、絵がなければ意味不明の文、自立していないテキストによる絵本に内田麟太郎さんなんか挑んでいて僕も興味を持っています」(小野)との回答が行われました。絵本の復刊が大切という小野さんの指摘はその通りだと思いますが、その場合どの作品を復刊するかには慎重な配慮が必要です。例えば『ちびくろさんぽ』の復刊には問題があるのではと思っていますとの疑問には、「復刊した出版社の人が回答するのがいいのですが、出版をしてその上でみんなで議論すると言ふことが大切だと思っています」(小野)との回答があり、この問題は短い時間で議論できるテーマではないので機会をあらためて行いたい旨の説明が絵本学会の企画委員会から行われました。今回のフォーラムでは、あらかじめ参加者が持参する絵本とその理由をまとめたレジュメを全員に配布しました。参加者の年齢が比較的若いためか、これまでに刊行されているブックリストとはかなり異なる、実にバラエティに富んだユニークな絵本リストになりました。今回のフォーラムを通して、絵本を子どもたちに与えるためだけでなく、子どもとともに楽しむ、あるいは自分自身の楽しみとして主体的に絵本を読む人が確実に増えてきているとの印象を強く持ちました。

(いくた・よしあき 絵本学会企画委員・世田谷文学館)

談話サロン “江國香織氏の部屋” 川西 美沙

第一部では、江國氏に「絵本ファンの立場から」という立場で話して頂いた。江國氏は気に入っている絵本として、「乙ちゃん」一かべのあなー(井口慎吾作)と「マーサのいぬまに」(ブルース・イグマン作)、ピーター・ラビットの絵本「モペットちゃんのおはなし」(ピアトリクス・ポター作)をあげ、さらに「写真集—アメリカン・カントリー・ファミリー」(ポロシャム・ラム)を、文章はないけれど、写真がよく物語っている好例とした。「乙ちゃん」は、色・構成の点で、一ページ目から引き込まれ、文章は簡潔だが、必要なことは十分盛り込まれている。「マーサのいぬまに」はおしゃれなつくりで、



「江國香織の部屋」の風景

文章もおもしろい。また、絵本は物体として好きで、絵があるのがいい。ページをめくって進んでいくところがいい。開いたところにできる空間に、臨場感が生じる。小説より短いところも魅力、など作家の目が感じられる発言もあった。

第二部の、江國氏の談話サロンには50名程の参加者があり、各々が持参した絵本の中から江國氏との談話の上、票数の多かったもの、あまり知られていないものを選んで紹介してもらった。票数が多くてもよく知られているものは割愛した。全体としては重なりが少なく、数多くの絵本の名があがった。紹介してもらったのは、「あまつぶぱとりすぶらっしゅ」「ちずのえほん」「ルピナスさん」「オーケストラの105人」「ちょりりんのすてきなセーター」「ねこのホレイショ」「GREEN TO GREEN」など。好きな理由も様々で、絵の魅力、言葉の美しさ、楽しさ、仕掛けの面白さ、発送のユニークさなどがあがった。子供の時からずっと好きな絵本（「ぶたぶたくんのおかいもの」「ぐりとぐら」「はるかぜのたいこ」など）、子どもの時から元気の素の絵本（「もぐらとすばん」）などからは、子どもの時に読んでもらう本の影響の大きさがうかがえて興味深かった。松谷みよ子の「のせてのせて」をあげた人は、トンネルの真っ暗なページの箇所の言葉が頭にこびりついて、後年になっても列車がトンネルに入るとその言葉が浮かんでくる経験を話した。また、「エンソくんきしゃにのる」をあげた人は、その魅力を子どもに教えられたことをあげ、絵本との出会いのきっかけに原画をあげた人もいた。絵本との出会いには個人的な要素が強く、好みにも個人的な体験がまつわっていることが今回のフォーラムから読みとれた。あがった本のタイトルが多様だった理由の一つもそこにあるのではないだろうか。（かわにし・ふさ／絵本学会企画委員）

談話サロン “結城昌子さんの部屋” 香曾我部 秀幸

結城さんの『ひらめき美術館』を例に、あらためて子どもたちの発想の豊かさとユニークさを確認するところからサロンは始まった。参加者は14人と比較的少人数だったこともあり、一人ずつじっくりと持参の絵本について語っていただいたが、挙げられた絵本は『ちいさなうさこちゃん』、『ねこのホレイショ』、『いわしづん』、『いちご』、『とりかえっこ』、『だれとだれかとおもったら』、『SEASONS』、『ふしげの絵』、『オーパルひとりぼっち』、『わすれられないおくりもの』、『ロッタちゃんとじてんしゃ』、『クリスマスまであと九日—セシのポサダの日』等で、変わったところでは昭和初期の絵雑誌『コドモノテンチ』や、イランの絵本『キアロスタミ（あなたたち子どもの見た世界）』が紹介された。自作の絵本を持参



「結城昌子の部屋」の風景

された方もあった。“究極の一冊”を選ぶために皆さん随分苦心されたそうだが、見事に一冊も重なりがなく、それぞれの絵本にかける思いには相当深いものが感じられた。

古今東西様々な絵本に話題が及び、近年の絵本に対する关心の深まり・広がりが感じられたひとときであった。ただ、結城さんのお仕事から見て、美術的視点・視覚表現に特徴を持つ絵本に集中するのではとの予測を持っていたのだが、そのような傾向はとくに顕著でなかったのは意外だった。かわりに、子どもとの関係の中から浮かび上がる絵本、あるいは自身の幼児の記憶にある映像の断片という観点で選ばれたものが多く見られた。しかし、幼い頃の絵本体験や美術体験が、有形無形に成長後の自分自身にかなり強い影響を与えているという発言が、多くの方からあったことは注目すべきだろう。

結城さんは、「画家が本当に愛したのは＜私たち＞なんだ。画家は、その表現を通じて自分を見てくれる人を求めている。」と語る。作者と鑑賞者の意識のキャッチボール、心の対話があってこそ、アートは成立する。これはあらゆる表現活動にあてはまることで、絵本においても、読者は作り手から求められている存在と考えることが可能だ。自分の力で自分の1冊を見つけることができたとき、自分は作家から選ばれた読者なのだ、と自負してもよいのだろう。

「私たちおとながいま必要としているのは、自分の中の子どもの部分をどれだけ思い起こせるかということ。」と言う結城さんの言葉に、参加の皆さんうなづくことしきりであった。

（こうそかべ・ひでゆき／絵本学会企画委員長）



「小野明の部屋」の風景

談話サロン “小野明さんの部屋” 岩崎 真理子

絵本の編集者であり、デザイナーでもある小野明さんの部屋には、絵本作家の卵、保育者、母親、絵本愛好家、研究者などなど、多彩なメンバーが30人も集まりました。せっかくお気に入りの絵本を持ち寄ったということから、小野さんのご提案で、一人ずつ紹介したあと小野さんからその絵本についてコメントしていただくという形ですすめられました。一冊として同じものがなかったことに驚かされました。むしろだれもが知っている古典絵本はほとんど登場せず、私だけの一冊という熱い思いが伝わる分科会でした。

だれもがもっと語りたいという思いを抱きつつ、限られた時間の中でうまくまとめて下さったので、時間いっぱいになりましたが、何とか全員の絵本の紹介を聞くことができました。そして、一冊一冊にまつわる編集者ならではの小野さんの視点からの絵本論や、絵本制作にまつわるエピソードは、時間を忘れるほど楽しく、貴重なものでした。（いわさき・まりこ／絵本学会企画委員）

『絵本フォーラム In 関西 Part1』報告

香曾我部 秀之

去る5月16日(日)、大阪万博公園の大蔵国際児童文学館で、『絵本フォーラム in 関西 part1』が開かれました。東京以外では初めての試みのため、準備段階から手探りの状態が続きましたが、児童文学館関係者・研究生など多くの方々のご協力を得て、無事開催に漕ぎ着きました。参加者は92名。テーマは「絵本を持って集まろう!～私が選んだこの一冊～」。参加者全員がご自身の究極の絵本一冊を持ち寄ってその絵本に寄せる想いを互いに語り合おうという試みです。

◆第1部 「私はこの絵本が…」編

司会 三宅興子氏(梅花女子大学)

異なる分野で絵本と関わりを持っておられる4人の方々に、それぞれの立場・観点からくこの一冊を選びで語っていただきました。

1. 子どもと共に読む立場から 村川京子氏(大阪薫英女子短大)

村川さんが挙げられたのは『またもりへ』(マリー・ホール・エット作)。森の中で動物たちと心ゆくまで遊ぶ少年を暖かく見守る父親の愛情が、豊かに描かれた佳品です。村川さんは、長年図書館や家庭文庫に携わり、子どもたちと共に絵本を楽しんでこられた経験に基づいて、この絵本を、子どもの内面への深い洞察と、自然への信頼と愛情がこめられた作品ととらえ、絵本を通じて子どもたちが心静かに「満たされた気持ち」を持つことがとくに重要だと説かれました。

2. 絵本の創り手の立場から 松野正子氏(作家)

ベストセラー作品を数多く生み出してこられた松野さんにとって、作品はどれも大切な子どもたち、殊更に優劣はつけられないということですが、今回は季節に合わせて『不思議なたけのこ』(松野正子作・瀬川康男絵)を挙げられました。永遠の名作を作者自らがじっくりと読み語る贅沢なひとときを、参加者は味わうことができました。読み語るたびに、その季節や状況により、新しい何かが作品に加わり、読み手や聞き手の個性・生命が反映されて作品は育っていくもの。絵本を読むこと自体がクリエイティブな行為であることを、ソフトな口調で語られました。

3. 造形表現を論じる立場から 中川素子氏(文教大学)

絵本を、従来とは異なった広範囲な視野からとらえようとしている中川さんは、『小さな池』(新宮晋作)に描かれた、空と池を結ぶ垂直線によって昇降する視点は、地球環境に対する作者の深い思考の



左から、村川・松野・中川・渡邊氏

現れだと分析されました。そして古今の「キリスト像」のスライドを例に、絵にこめられた画家の<思想>を読み取ることの重要さを説き、様々な創造活動・美術の動きのただ中で絵本を論じ、<現実の世界に対峙し、時代の思潮を作り得る作品>を正当に評価するための、眞の意味での絵本評論の必要性を強く唱えられました。

4. 社会学的立場(住環境論)から 渡邊公生氏(建築設計家)

このセクションでは、絵本の画面にあらわされた住居や都市空間、あるいは逆に絵本を含めた生活空間を設計理念にどう生かすかなど、従来の絵本を見つめる視点には無い建築家としての絵本論を、企画者側は期待していたのですが、京都で建築設計事務所を営む渡邊さんのお話は、一人の父親としての体験に基づいた絵本論でした。『てがみ～わたしのきもちをきいて』(ガブリエル・バンサン作)を挙げ、大人たち(とくに父親)にとって今、絵本が必要であること、親が子とともに一冊の絵本を読む時間と空間を共有することで悪い住環境が心理的に改善されること、絵本で色々なことが疑似体験できる大切さを話されました。

◆第2部 「私にも言わせて」編

◆第3部 「あの人の話を聞きたい」編

昼食休憩後の第2部とティーブレイクを挟んでの第3部では、4つの小部屋に分かれ、第1部の話題提供者を囲んで、参加者がそれぞれに持参した「この一冊」を紹介し、互いに語り合いました。(渡邊氏のスケジュールの都合で1と4が合同の部屋となりました。)各部屋の話題の詳細を各司会者・記録係から報告します。

◆第2部「わたしにも言わせて」編

「村川京子・渡邊公生のへや」からの報告

司会 大橋真由美 記録 瀬川光治

<子どもとともに読む立場から>の村川さんと<社会学の立場から>の渡邊さんを囲んで、合同の部屋でスタートした。最初に集まつたのは、男性4名を含む22人。皆が持ち寄ったのは、『くんちゃんのはじめてのぼうけん』『ルピナスさん』『ほしになつたりゅうのきば』『もりのなか』『いってらっしゃーい いってきまーす』『わたしのワンピース』『こすすめのぼうけん』『うさぎさんてつだつてほしいの』『ひとまねこざるときいろいぼうし』『にじいろのさかな』『しろいうさぎとくろいうさぎ』『あおくんときいろちゃん』『空気と水の実験』など。参加者も主婦が多かったものの、大学生の女性から図書館・文庫関係の人までさまざまであった。

第2部は、「私の選んだこの一冊」について語ってもらつたが、全員が話し終わるまで予定時間ぎりぎりまでかかった。ほとんどの方が



左から、中川素子・渡邊公生氏

初対面だったが、「私の一冊はこれです」と話しかめると、「うんうん」「そうそう」とうなずきながら同感している様子が見て取れた。何人かの発言を紹介すると、二十代の男性は『はせがわくんきらいや』について「思い入れが強過ぎて簡単には語れない。賛否両論あるが、自分にとっては大切な本。」と語った。もう一人の男性は『かばんうりのガラゴ』を紹介し、「絵の中に仕掛けがあちこちに隠されていて、謎探しのように絵を楽しめる」として、大人も絵本を楽しむという立場から語ってくれた。『ちびくろサンボ』を選んだ和歌山の主婦は、「自分が子どものころ読んで楽しかった絵本を自分の子どもに読んであげたい」と思って、何種類もの『ちびくろサンボ』の絵本を買ったそうだ。「差別問題とも絡んでいると言うけれど、自分も楽しかったし、子どもも楽しかった」と語った。

ティーブレイクを挟んでの第3部は、司会者の提案で、キーワードを「出会い」としてスタート。全体としては「教育・子育て」的意見交換会になった感があるが、その中でいかに自分が絵本を読んでいて楽しいか、勇気付けられるかなどが語られた。

まずは渡邊氏にいくつかの質問が向けられた。「大人たちよ絵本を読みなさい」という渡邊氏の意見について、氏は「一時期無機質な建築が流行したが、近年フローリングなど木の暖かさを見直す動きがある。これは、子どもも大人も現実の生活に暖かみがないことに不満があるので?と思う。人間にとって過不足無く風通しや入ってくる光の量が必要で、そういう空間を建築家として生み出したい」と建築家の立場から語り、自分自身の経験からも「精神的なゆとりを生み出すものはく絵本だ」と述べられた。

また絵本の読み聞かせと男性(父親)に関しての質問では、「こういう集まりに来るほとんどが女性だというのは問題ではないか」と答え、夫に絵本を読ませるには?という質問には、「男性が読むには女性っぽい言葉が多くすぎる」と述べられ、この問題について活発に意見が交換された。

「昔話・冒険ものなどが男性には読みやすいのでは?」「語りかけるときも、単調過ぎるのがよくないのでは?」などの意見も出された。次に「絵本と子育て」に話題の中心が移った。

「キャッチボールは父の仕事で、本を読み聞かせるのは母の仕事という垣根があるような感じがするけれど、その垣根は取り除く方がよい」という発言などがあった。村川さんも、子どもと文庫活動に深く携わっている立場から「子どもにちゃんと話を聞いてもらいたいと思ったら、大人の側も子どもからたくさんのお話を聴いてあげるゆとりが必要だ」と述べられた。

さらに話題は「テレビ、ゲームと絵本」にも発展し、実体験、コンピュータゲーム、絵本の関係、面白さ・刺激の強さなどに関して意見の交換がなされた。そこでは、第2部で『よあけ』の絵本を「私の一冊」に選んだ女性の実体験が再び話題となり、「目で見る絵本」「聞かせてもらう絵本」など絵本の特性についても、色々な意見が出された。

「出会い」というキーワードでのスタートではあったが、この部屋に参加された人たちの多くが、自分自身の絵本との出会いのみならず、子どもたちと絵本の出会いを大切にしている人たちであったようだ。『絵本を持って集まろう』という催しは、ほとんど誰もが初めての経験だったであろう。「講演を聞く」「研究発表をする」といった参加の仕方とは違った意味で、充実感があったのではないかと思う。ただ、時間が限られて、話し足りない、あともう少し話を聞きたかったという気持ちを持って、帰られた方も多かったことと思われる。

このような形式も含めて『絵本フォーラム』第2弾の企画を今後進めていきたい。

【松野正子のへや】からの報告 司会 石川晴子 記録 中西美季

参加者のべ19名の顔ぶれは、デザイン学校教師、元取次店社員、保母、司書、学校図書館司書、おはなしボランティア、文庫関係者、研究者、幼児教育の講師、作家のたまご、絵本画家など多彩だった。
＜私が選んだ“今日の”一冊＞

『あまがさ』『いもうとのにゅういん』『うさぎ』『おとうさんのえほん』『おぼえていろよおおきなき』『こぎつねキッコえんそくのまき』『ねずみのおいしゃさま』『ねずみのけっこん』『よあけ』『わたしとあそんで』 "My Dolly's Home" "The Unicef Book of Fairy Tales"

＜絵本の文と絵＞

午前の会で、絵本を作る上で文と絵のどちらが上か下か、また、作家と画家がけんかすることがあるのか、という話が出たのを受けて、午後は、両者が対等に協力し反発し刺激しあいながら作業していくという話から始まった。自分の経験として、松野氏はコロンビア大学で "A Pair of Red Clogs (あかいげた)" を書いた時のこと、また『ふしぎなたけのこ』や『かさ』『いいいす いいな』ができるまでのことを、具体例として話した。「『ふしぎなたけのこ』は話がてきてから、松居直氏に見せ、それからだいぶたってから、見開きを縦横自在につかた絵本にしたいというお手紙をいただきました。それまで、ずっと、構想を練っていて下さったのでしょう。今では、縦横自在の本はいろいろありますが、当時はめずらしく、びっくりしました。」「私は絵が描けないけれども、お話ができるいく時には、絵が見えています。それでも、こちらから、どういう絵にして欲しいと言って原稿をわたすわけではないので、実際にどんな顔をした主人公になるのか、どんな場面になるのか、ラフスケッチを見る時にはどきどきします。」

画家に直接会うこともあり、会わないこともある。編集者と三人で話し合うこともある。電話、手紙、そして今は、ファックスが大活躍するようになった。『かさ』の絵の原田治氏とは会っていない。「最後の4場面は、私の考えていたのとは異なった絵だったので驚きましたが、編集者を通して原田氏の考えを知り、また、時間的な制約もあって、文章のほうに手を入れました。それは、勿論、けんかではなく、検討し、考え方をていく作業です。私がはじめに考えていたのは、どちらかと言えばウェットだったのに対し、原田氏のほうのは、ドライで、軽みがあって、色もきれいで、雨の日の楽しい一冊になったと思います。」

一同「こういう話が聞きたかった」とうなずきあう。

午前の会で、『いいいす いいな』に、椅子の上で飛び跳ねる場面が欲しかったと言われたことについて、「大きい椅子にのぼるだけでも充分に大冒険だと思うので、飛び跳ねる場面は考えていませんでした。危険だからと規制がかかったわけ





第2部・第3部の様子

ではありません。子どもは、絵本に描いてあろうとなかろうと、いろんな危ないことをするものです。毎日の生活の中で、子どもを危険から守るのは、傍らにいる大人たちの役割ではないでしょうか。絵本には絵本の、別の役割があるのではないですか。勿論、わざわざ危ない遊びのヒントを与えるようなことは、避けるべきだと思いますが。」

<絵本のことば>

「もし飛び跳ねる場面を入れたとしたら、どんな言葉がいいでしょう。とびはねられていいなーでは、説明的すぎます。はねられていなーでは、漠然としています。ぴょんぴょんできていなーでは、甘すぎます。はねれていなーでは、「ら抜き言葉」で、私にはなじめません。むつかしいですね。」

「幼い人は読んでもらって聞くのですから、まず、ひびきやリズムの楽しい、単純であって中身のある、イメージをよびおこす力のある言葉をつかいたいと思います。新しい世界がひらかれるような言葉に触れるチャンスが、絵本の中にあってほしいと思います。」

編集者と作家と画家が、子どもの本について基本的に共通の考えを持っていること、また、それぞれが、どんな本にしたいのか、しっかりした考えをもって、力を合わせることが大切。作家としては、どんな言葉を、どう使うか、絵ができるがってもなお、最後の最後まで考える。むつかしいけれども、楽しいことでもあると、編集者と作家のコメントが細かく書き込まれた『いいいすいいな』の2種のラフスケッチやゲラ刷りを例示。読んでもらって、聞いて楽しんでいる中に、知らず知らず、豊かな、美しい日本語を身につけられるようあってほしいと、また、一同うなずきあう。

<絵本をつくる>

ここで絵本画家の発言。話が先に浮かぶときと、絵が先のときがあるが、絵に話をこじつけて面白くなつたためしがない。同時進行で温めていけるのが望ましい。多くの国で出版されると、風土に合わせて微妙に色が違っていて面白い。原画と多少違っていてもしかたない。安価で同質の絵本を手にとってもらうには、印刷されたときの色を想定して描くのがプロだし、職人さんにインク混ぜてもらつていては、高価につきすぎて生き残れない。黒だけで800色、白は200色あるし、製版代、インク代が高いので、初稿は非常に高価だが、自費で、いいカラーコピー機で作ると、一冊八千円から一円はかかることを思えば、絵本は高いようで安い、と、このあたりは、質問しては口あんぐりが続く。とにかく、文しか書けなくても、絵しか描けなくても絵本作家は成立するし、対等であると再確認した。

<絵本を手渡す>

その絵本と出会える、体験できる機会を保証するのも大切。公共図書館、学校図書館に、子どもに本を手渡す「ひと」が必要だし、流通も含めて、目を養うこと、意見を持っている人が育つことを願う。新聞書評でも、絵本にかぎらず子どもの本をもっと取り上げてほしい。名作復刊も商法として定着したが、常に名作を出し続けていられるような環境を整えるべく、この場にいる者から一步踏み出せればいい。絵本学会にはしなければならないことがたくさんある。今後の活動に期待したい。

「中川素子のへや」からの報告

司会 畠田美鈴・廣田真知子 記録 寺前君子

参加者の最も多かったのがこの部屋。30名を越える方が、中川素子氏を囲んで丸く座り、「この一冊」を紹介し合った。「一冊に絞るのが難しかった」「好きな本はその時々で変わる」と言いながらも、紹介された絵本には、それぞれの思いや人生が投影されており、参加者の共感を誘った。造形表現を論じる立場の中川氏を囲む部屋ではあったものの、子どもと共に読む立場としての発言が多かったというのが全体の印象である。以下に、簡単に「私が選んだこの一冊」を紹介しておく。

自分の好きな人の大切さがわかる『100万回生きたネコ』、子どもの前では緊張してしまうが、ことばも絵もシンプルだからこれなら伝えられると、保育科の学生が選んだ一冊『へんてこへんてこ』、一枚のジュークで部屋ができるのが楽しい『たろうのひっこし』、子どもの心に静かに入っていく『くんちゃんと虹』、図書の時間の読み聞かせで、次に何が出てくるか、子どもも自分もわくわくした思い出の一冊『キャベツくん』、未翻訳だが、韓国の色と絵、韓国そのものの『カマクナルヘセオンサンソ(まくろ国から来たむく犬)』、スペインのバルセロナで買った蛍光インクで印刷された絵本『SUEÑOS(ねむり)』、目の見えない子に世の中を教える祖父の姿に感動した『青い馬の少年』、ペーブサートで実演したときの子どもの感動が忘れない『あおくんときいろちゃん』、書き出しの一に行に衝撃を受け、自分たち夫婦の色々な思いが重なる『生まれてきた子ども』、読んでやった時はそれほど反応しなかったのに、子どもが選んだ一冊は、『かもさんおとおり』、絵を読むと言うことに納得させられた『ラブンツエル』、子どもの持っているエネルギーや内面が色やタッチで描かれている『どんどん どんどん』、心理カウンセリングを学ぶ学生が実習で接した女子中学生の心に初めて届いたと感じた『ダクチルダクチル』、物語絵本の傑作でもあり、編集者として思い出深い作品『ちいさいおうち』、美術大学で学んでいた時に、光の表現の仕方に衝撃を受けた『よあけ』、画面やことばにリズムがあり、歌わずにはいられなくなる『きょうはみんなでクマがりだ』等々。

最後に、中川氏から「一人一人それぞれに、切実な思いや経験に基づいた紹介で、絵本がコミュニケーションとしての主体であったり、作品としてだけでなく、色んな人間の中で絵本が生きているということが実感できたように思う。芸術的と言うことを誤解しないでほしい。芸術は雲の上のものではなくて、今、みんなが参加して成り立つアートを多くの芸術家が考えている。色んな人と交じり合ってそこに芸術が成り立つか、ということをコンセプトにして創っている人もいっぱいいる。たとえ、アニメであっても、人体(の構造)がわかった上で描かれているものもある。そういう意味で、絵本でも、

本当に描ける人がほしいと思っている。従来、絵本は、絵と言葉の二つでしか考えられてこなかった。が、本を見たり、読んだりという場でも、もう少し、触覚、体感科学的なことを考えてほしいと思っている」との感想で2部は終了。

◆第3部「あの人の話を聞きたい」編

第2部の参加者のほぼ全員が引き続き参加した。2部は各自の絵本紹介に終始したため、3部は、参加者の強い要望のあった中川氏のお話と、質疑応答を中心に展開した。

まずは、新宮晋氏の『小さな池』を説明するために持ってきたといふ、同氏の『いちご』『くも』、車椅子に乗っている障害者と車椅子を押す人の共作である『わたしいややねん』を例に、従来の絵本にはない試みと、今後の絵本について、中川氏は次のように語った。『いちご』は1960年から70年代にかけて、イギリスやアメリカそして日本で、芸術家たちが「アーティストブック」というものを、試みた時代の中から生まれた、造形的な感覚で出来た作品。『いちご』も『くも』も、いちごの断面図やくもの糸を張る力など、造形的な感覚・興味から出発しており、いちごが惑星の一部となったり、くもの巣が宇宙の成り立ちと合わさって見えたりというふうに、イメージを広げていく。『わたしいややねん』は輪郭線だけのところ、きっちり描いたところ、車椅子を包んだところ、最後に椅子がダントンと出てくるところ等、全体の構成としてとてもうまい。両者の画面に対して縦に動く動きは、左右への線的動きのみを考えていた従来の絵本作家の表現にはないもの。時間の概念をはじめ、いろいろな物事を、空間的に把握することなど、もっと多様な表現ができるはずだ。いろいろな、アーティストが絵本に入ってくれることで、今までの絵本にはできないことができるだろうし、他の分野の人が絵本から学ぶことが多いはず。もっと絵本の世界が活発になって、絵本独自の見方からもっと現実に対峙し、新しい視点をだしていかなければならぬのではないか。」

その後の質疑応答の概略は以下の通り。

Q：現代アートの若い作家たちは、なぜ絵本に携わらないのか。

A：絵本の表現に出版物としての制約があるからではないか。絵本以外にもっと自由な表現メディアがあるからだろう。絵本爱好者側の視野の狭さも一因。

Q：現代アートの人が絵本の世界に入ることを、出版社ではどのように考えているのか。

A：若い芸術家たちがやってるアートのいろいろな試みを出版関係者はもっと注目すべき。

Q：絵本は、絵とことばが一体となった世界だと思うが・・・。

A：ことばの表現力を否定するつもりはない。が、画家の描き方によって、人物像がまったく違ったように見える。絵が新しい読み取りを可能にすることを分かってほしい。

Q：絵本を多面的に捉えるとはどういうことか。

A：親と子どもという視点ももちろん大切だが、もっと新しい多様な視点を持って、作家を育てる必要だ。

<2部3部を終えて>

参加者各自が一冊の絵本をじっくり語り合っていくには、集まった人数が多くすぎたこと、広すぎた空間、漠然とした設定、司会の拙さなど、様々な原因が考えられるが、終了間際になってようやく発言が噴出し始めたため、これからおもしろくなりそうだというところ

で終了となった。当初想定していた、絵本の造形表現に焦点を絞った語り合いの場にまでは、至らず、議論が散漫になった印象もあるが、参加者それぞれの絵本への思いが自由に語り合える場となったことは、第1回のフォーラムとして、意味のある一步となつたのではないだろうか。また、関西では初めての中川素子氏を囲む場に、参加者の大多数が強い関心をしめたのも、各自がさらに絵本を広く捉えていこうとする積極的な気持ちの現れであろう。「絵本は小さいけれど、大きな世界」と中川氏がいうように、絵本の魅力を再認識した一日だった。今後のフォーラム等の展開が楽しみである。

以上の各部屋からの報告で、当日のフォーラムの雰囲気はご理解いただけたことだと思います。参加された皆さんに持ち寄られた絵本は実に多彩でした。数ある愛読書の中から究極の一冊を選定することは大変難しく、皆さんさぞかしだれましたことでしょう。でも、ほとんど重なることもなく、ご自分の深い思いをこめられた一冊を選んでいらっしゃいました。今回のフォーラムは、過去2度の東京でのフォーラムの経験を踏まえて、あえて明確なテーマを設けず、持ち寄られた絵本の中から臨機応変に話題を引き起こそうとの構想であったわけですが、参加者の皆さんのが自由に発言出来る場がある程度確保できた反面、論点が希薄となり議論が咬み合わないという、プラスマイナス両様の結果が出てきたと思います。しかし、そんな中からも、今後考えて行かなければならぬ命題がいくつか浮かび上がっていました。

名作古典をまもることだけにとどまらず、新たな名作を生み出すための環境を整えなければならないこと。そのためにの真の意味での本格的な絵本評論の実現がいま必要とされていること。絵本を「手渡す」ことの重要さを考えること。より大きな視野で絵本というメディアをとらえなおすこと。子どもたちが（そしておとなが）絵本を好きになる場をどう確保していくか。等々。

絵本学会には重大な使命が課せられています。今後このようなフォーラムを展開していくと共に、地道な研究会・研究報告会などの開催を通じて、これらの課題を取り組んでいきたいと考えています。（こうそかべ・ひでゆき／絵本学会企画委員長）



第2部・第3部の様子

忘れかけていた“心”に——軽井沢

軽井沢絵本の森美術館 理事・館長 土屋 芳春

高原リゾート・軽井沢

明治19年、英国系カナダ人宣教師A.C.ショーは旅の途中に「軽井沢」を訪れ、この澄んだ空気と自然豊かな環境を好み、明治21年には軽井沢に最初の別荘を建てました。“心身を癒し、自然の中で自らのあるべき姿を見いだす場所”高原リゾート・軽井沢の、近代史の始まりでした。その後ショーは、“軽井沢が保健と勉学の適地”と広く紹介したため、友人や内外の要人、文化人が競って避暑に訪れたり別荘を建てました。「娯楽を人に求めずして、自然に求めよ。これが軽井沢の至る所において叫ばれる言葉であって、唯一の主張または方針である。[かるぬざわ(佐藤孝一著:大正元年)]」。ピューリタンな精神が息づき、自然に囲まれた“天然のサントリウム”軽井沢は、その後も安らぎを求める多くの人に愛され続けています。また、碓井峠を機軸として東西文化の出会いの場である軽井沢には、ヴォーリズやレーモンドが関わった建築遺産や外国人から伝わった食文化、多くの文人が記録にとどめた書物や詩碑があり、サロンとして情報発信基地として、また、歴史遺産の証人としての役割があります。

そんな軽井沢に最初の美術館(軽井沢高輪美術館=現セゾン現代美術館)が設立されたのは、1981年のことでした。“豊かな自然と解放された空間の中で、精神的な潤いを求めながら、新たな発見をするところ”。今では、観光地や名のしたれた場所に博物館施設が点在していますが、軽井沢はその先駆けの地でした。その後、「田崎美術館」や「軽井沢高原文庫」「ペイネ美術館」「脇田美術館」「ル・ヴァン美術館」「メルシャン軽井沢美術館」などの施設が次々に開館し、エリア全体が広域的な文化ゾーンを築いています。



絵本の森美術館外観

美術館の施設と環境

そのような歴史と“西洋文化が融合する軽井沢に、西洋に端を発した絵本の文化イメージは同化するもの”と考え、「絵本を通した文化・芸術への寄与と新たな創造の場」を主眼に、1990年7月‘軽

井沢絵本の森美術館’は開館しました。

美術館は、“軽井沢らしさ(豊かな森林や高原植物、多くの文学作品の舞台となった叙情性)の再構築と、絵本や物語に登場する森への問題意識と再生”を理念として、開館以来3期に渡り成長をしてきました。現在は、「欧米絵本の歩み」を常設的に展示する第1展示館、企画展や特別展を主におこなう第2展示館、1,300冊の原書や翻訳絵本が閲覧できる図書館、原書絵本や日本の古典絵本、周辺のグッズを紹介する二つのミュージアム・ショップ、自然と建物と一体化するティールームが、から松や雑木林に囲まれた15,000m²の森に点在し、森の中で回顧と創造、そして豊かな心を求めることができます。



絵本の森美術館の周囲の環境

事業と収蔵資料

主に、春と夏に開催する企画展・特別展と秋・冬を中心に関催する収蔵品展など、年3回ほど企画展示を行っています。お馴染みのグリムやアンデルセン、マザーグース、クリスマスを題材にした企画展や、アメリカ、イギリス、ポーランドなどの国別絵本展、BIBや女性イラストレーター、キャラクター絵本、現在活躍する作家の個展など、幅広く絵本の世界を紹介しています。また、サロンコンサートや講演会などのイベントの他、近年は、“動く美術館”を目指し、学芸員によるギャラリートーク、ワークショップなど参加型のイベントを積極的に開催しています。

研究と収蔵は、軽井沢の歴史的背景を考え、主に「欧米絵本のあゆみ」をテーマに、近・現代活躍するイラストレーターの絵本原画と古典的絵本から現代まで、その他絵本資料などをあわせ3,500点ほど収蔵しています。主な収蔵絵本は、コメニウス「世界図絵(1777年12版)」、ビューアイック「英國鳥類史1巻(1797年2版)、2巻1804年初版」、マルレディー「ちょうどうの舞踏会とバッタの宴会(1807年初版)」、アルニムとブレンターノ編「少年の魔法の角笛(1巻1819年版)、2巻(1808年初版)、3巻

(1808年初版)」、クルックシャンク「ドイツ民話集(1869年版)」、ホフマン「もじやもじやペーター(1848年オランダ版)」、ペーダーセン「アンデルセン童話集(1868年版)」、ドイル「妖精の国にて(1875年版)」、クレーン「幼子のオペラ(1877年初版)」、グリーナウェイ「窓の下で(1878年初版)」など。絵本原画では、コールデコット「ブレイスプリッジ邸のためのスケッチブックより(1877年)」、T.H.ロビンソン「日本の神話—神々の国の伝説より—(1895年)」、C.ロビンソン「アンデルセン童話(1899年)」、クレーン「花の結婚式(1905年)」、C.M.バーカー「スノードロップの物語の木(1924年)」、マックロスキーフ「子どものくらし(1943年)」、H.A.レイ「どうながのブレッツエルとこいぬたち(1946年)」、ワイルドスミス「くまくんのトロッコ(1973年)」、ツヴェルガー「赤ずきん(1983年)」、ル・カイン「ハイワサのちいさかったころ(1984年)」など、絵本の研究では欠かせない、貴重な資料を数多く収蔵しています。



展示室

これからの活動

98年4月に関連施設、旧東ドイツ・エルツ山地に伝わる伝統的木工芸おもちゃを紹介する「エルツおもちゃ博物館(軽井沢)」が開館しました。それを機に、エリアを《ムーゼの森[人間の知的活動を司る女神“ムーゼ(独語)”。ギリシャ神話において彼女たちは芸術を愛し育み創造する象徴。ここにはムーゼのように、芸術を愛し育む精神が息づいている。]》と称し、活動を始めました。

軽井沢絵本の森美術館は多くの方に支えられ、今年開館10周年を迎えました。社会的認知が高まる中、その責任を痛感しています。絵本は“時代を写す鏡”とも言われています。毎年様々な形で出版されてくる作品とともに、読み手側の意志も常に判断する必要を感じています。いつまでも伝えたい質の高い“素晴らしい絵本”と、新しい可能性を見いだした作品を、美しい形で優しく伝える努力をして行かなければなりません。軽井沢絵本の森美術館は、美術館自体の社会につながる特徴ある展示は元より、情報発信基地としての役目と、絵本に関わる多くの方々との輪が広がることを願っています。

近年、民間文化施設でつくる「軽井沢美術館協議会」が発足しました。相互の情報交換とともに、行政と一緒に地域発展のあり方を模索する機能を負っています。そのような団体への積極的な関わりや、軽井沢の歴史的別荘建築遺産を保護する「軽井沢ナショナルトラスト」や、その歴史や文化・生活遺産を活用し地域全体を博物館とする「軽井沢エコミュージアム」など、地域文化を支える人たちとのコミュニケーションも重要な課題として考えています。

《インフォメーション》

軽井沢絵本の森美術館・Karuizawa Museum of Picture Books

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

tel. 0267-48-3340 fax. 0267-48-2006

e-mail : ehon@karuizawa.ne.jp

URL http://shinshu.online.co.jp/museum/ehonnōmori/

開館期間 通年

開館時間 9:30~17:00

(7~9月 17:30まで。12~1月 10:00~16:00)

休館日 火曜日(夏季無休)

1月下旬から2月末、年末年始の一部、展示入れ替え。

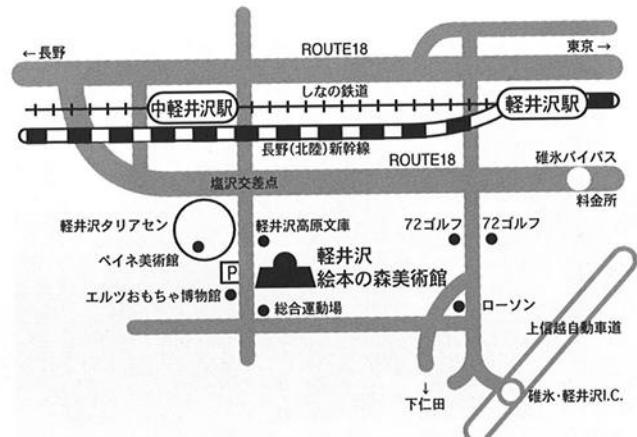
入館料 大人700円、中・高生500円、小学生400円

(特別展時料金変更有り)

団体(15名以上) 10%引き。障害者割引。

エルツおもちゃ博物館との共通割引セット券有り。

交通 (電車) JR長野新幹線・軽井沢駅下車、車10分
しなの鉄道・軽井沢駅、中軽井沢駅下車、車10分
(車) 上信越道・碓冰軽井沢ICから15分



絵本イラストレーションの世界を ダンディーに生きる

絵本作家 太田大八
Daihachi Ohta

取材 石井光恵(運営委員)・岩崎真理子(企画委員)

絵本学会には、多くの絵本作家や絵本画家が所属しています。オジャマムシではありますが、そのような方々をアトリエにお訪ねし、その記事をニュースレターで会員の皆様にお届けしようというワーク企画がスタートすることになりました。まず、はじめにこの楽しい仕事を手がける光栄に浴させていただいたのが、運営委員の石井光恵と企画委員の岩崎真理子です。

私たちは、なんといっても密かな憧れであった、大ファンの絵本学会長太田大八先生をお訪ねさせていただくことにしました。絵本学会の企画とあって、先生はご快諾下さり、1999年8月5日の夏の暑い日に、二人して練馬のアトリエへ伺ってきました。



アトリエ 外観

先生のお宅は西武新宿線練馬駅下車5分。素朴な下町情緒の残る商店街を抜けると、住宅地が続きその一角に先生のアトリエはありました。写真をご覧いただけるでしょうか。白いフェンスがとてもモダンなお宅で、先生のアトリエは写真の正面2階。花がたくさん飾ってあるところにあります。

2階のアトリエにご案内いただいて、すぐ目に付いたのが、面白いコレクションふたつ。一つは、帽子のコレクション。もう一つは何十個というフクロウの人形コレクション。飾り棚いっぱいに集められたフクロウたちが、訪れた私たちの目を楽しませてくれました。帽子のコレクションを見たときには、すぐに、「太田大八さんのこと^{だいはち}を、ぼくたちは敬愛の念をこめて“大八さん”と呼ぶ。大八さんは白髪の今もジーンズが良く似合う抜群のダンディで、女性編集者から素敵な画家No.1にランクされている。」という田畠精一さんの『Pee Boo』誌のことばを思い出しました。本当に、「ダンディ」ということばがよく似合う太田先生です。この日も濃紺のTシャツ

にジーンズで、出迎えて下さいました。「うーん、ダンディ！」（なんとミーハーな私たちでしょう）と唸らせられてしまいました。ミーハーついでに、アトリエのご紹介。部屋の壁面は全て木張りで、木が持っている柔らかな自然の温もりに溢れた、ゆったりとしたアトリエになっています。また、部屋には大きな書棚があって、絵本やイラストレーションのものでしょうか洋書が、その書棚一杯に所蔵されています。それらの本たちがかもし出すモダンな知的雰囲気と木の壁の温もりが微妙にマッチして、「部屋までダンディ」です。太田先生の写真後方に大きな木製の書棚があって、ぎっしり本が入っているのがおわかりいただけますでしょうか。それに、先生の原画が、壁にいくつも掛けられています。その一つ、絵本『カラスとよる』(フレーベル館)の原画は、筆舌に尽くしがたいほど美しいものでした。この本は、私の好きな本でもありましたので、本当に感激でした。原画展で見るよそよそしさもなく、美しいと思う私の心がそのままそこにいて、なんとも言えない至福の時間でした。微妙なことではありますが、絵本が先生の原画の美しさを十分に表現しきれていない残念さが心に残りました。絵本しか知らないときは、十分それで美しいと思っていたが、原画を見てしまうと絵本がかすれてしまう気がして、絵本好きの私としては、なんとも複雑な思いでした。ちょうど荷造りの最中で、『ブータン』(こぐま社)の原画も拝見したのですが、思いは同じで非常に美しい原画でした。先生は淡々としておられます、原画の感触と絵本表現のギャップに私は少々複雑でした。

先生の仕事机も、先生の
ご許可無しに掲載して
もらっています(先生、
ごめんなさい)。

先生は、絵本界の重鎮で
おられるのに、大変気さ
くなお人柄で、不羈なイ
ンタビューにも、ユーモ
アたっぷり、おもしろお
かしく答えて下さいま
した。先生の少年時代か
ら若いころにかけての
エピソードには、私たち
二人とも笑いどうしで
(インタビュアーとして
はかなり失格でしょう、
録音テープの中はうる
さい程の笑い声です。)



ふくろうコレクション



仕事机

「そんな幸福な時代でしたでしょうか」と後で複雑な気持ちになりました。戦争も含めて大変な時代を生き抜いたからこそ、その時代を笑い飛ばせるユーモアが太田先生にはしみついておられるようでした。

先生は『Pee Boo』(ブックローン社)の2号(1990.7)から18号(1994.11)までの計17回にわたって、「私のイラストレーション史 紙とエンピツ」を執筆されています。これは、太田大八先生の自分史であると同時に、日本の絵本イラストレーション史にもなっていて大変興味深いものですが、あそこで語られたことが走馬燈のように、私の脳裏を走っていました。大正時代ウラジオストックまで商売に出かけた雑貨貿易商のご両親のこと、長崎での少年時代、東京へ来てからのいじらしい登校拒否、戦争中の命拾いの話(一瞬の判断で原爆から免れ、生き延びられたお話には、人の運命の不思議さを深く考えさせられました。このエピソードは「紙とエンピツ」にも書かれていましたが、ご本人から直接伺うと、より一層臨場感があり、感慨深いものでした。)。また、画家の著作権獲得の主張とその行動のお話には目を見張るものがありました。

先生は『Pee Boo』18号で「いつのまにか年を重ね、ふりかえってみると、特に何かを目指したわけではないのに自然に絵本イラストレーションの世界に組み込まれ、人生の大半を絵本とのかかわりでの中ですごしてきました。私はこの仕事に誇りを持ち、楽しみ、絶えまなく刺激を与えられ、貧乏でも、病気でも絵を、絵本を思い描くとき、心身の安らぎと活力を覚えるのです。」と書かれています。このことば通り、先生はご自身の人生を歩んでこられたということが、インタビューをさせていただいている間中ひしひしと伝わってきました。先生と「引退」は無縁なことばに違いありません。最後に、今後の抱負を語っていただきました。「絵本学会があるでしょ。これはねえ、絵本についてのコンセプトをある程度明確に知ってもらう必要があるのではないか、そのためには学という名前をつけて、絵本学を打ち出せば、それによってみんなは絵本は学問的な大事なものなのだということに思い至ってくれないかなと考えたわけ。僕が考えている絵本学というのは、子どもも大人も含めて、絵本を見ることによって、心が豊かになるとか、潤うとかということ。絵本を通じて平和とか考えて、みんなの心が豊かになって、がつがつしないでいいける・・・。理想だけれど、絵本学会でワンステップベターが作れればいいと思っている。人間は次々死んでいくのだし、僕も明日死ぬのかも知れないし。バトンタッチしているわけ。

後事を託すということ。折角絵本学会が出来たのだから、一つのパワーの拠り所が出来て、そのパワーがどこまで集まるか、どれだけの効果を発揮するか、それは分からなければ、そういうものの可能性に賭けている、期待しているわけ。」このことばをひっさげて、東西奔走しておられる太田先生の絵本学会に賭ける期待は、とても大きいようです。太田先生、楽しいインタビューのひとときをありがとうございました。(石井光恵・絵本学会運営委員)



太田大八先生

太田大八プロフィール：1918(大正7)年12月28日、大阪に生まれる。ロシア政変後、ウラジオストックから大正10年に長崎県大村に引き揚げ、幼少期を大村で過ごす。この体験が、後の『だいちゃんとうみ』(福音館書店 1979)や『ながさきくんち』(童心社 1980)に描かれる。1928年東京に移り、戦前は粋な神田に暮らす。現在は練馬在住。多摩美術学校卒。戦後、羽田書店の「こども絵文庫」の仕事を契機に、児童書の挿絵や絵本の世界に入る。国際アンデルセン国内賞をはじめ数々の受賞に輝く。『かさ』『馬ぬすびと』『近世のこども歳時記』など作品多数。児童出版美術家連盟理事。1999年より絵本学会会長。

通信衛星を利用した 絵本に関する合同授業&研究会

通信衛星（文部省大学共同利用機関「メディア教育開発センター」の「SCS（Space Collaboration System）事業」）を利用して、絵本に関する合同授業（筑波大学・増成隆士教授+鳴門教育大学・佐々木宏子教授、および福岡教育大学）&研究会（絵本学会研究委員会主催）がおこなわれた。

1999年10月14日（木）13：30～15：00

（場所：上記大学のSCS教室）

プログラム：機器・送受信状態の調整・確認（10分）

[第1部] レクチャー（*1）&筑波大学での履修生による試作絵本の紹介（20分）－増成隆士
意見交換（5分）

[第2部] レクチャー（*2）（20分）－佐々木宏子
質疑応答（20分）

レクチャー（*1）

増成「絵本とは？——存在していない絵本から考える」

「絵本」とは何か？ひとくちに「絵本」と言っても、さまざまなものがある。一群のさまざまなものについて、それ全体の性格やその内部での差異などを見ようとするとき、それらを整理、分類してみるという方法が役立ち、この一見ナイーヴな方法が、実にドラマティックな役割を果たすということを示した古典的な例として、元素の周期表がある。

そこで、元素の周期表の場合の「重さによる分類」を援用して、絵本をそのページ数で分類する、ということから考えを進めてみると、絵本は一方で、知的消化能力の旺盛なおとなとの読者を得ることによって、現在のものよりも、もっともっと大きいものになりうるものではないか、というイメージが湧く。

他方、ページ数の少ない方では、2ページの「ミニマル絵本」を考えられ、実際にはまず存在していないそれを考へ、試作してみると、によって「絵本とは何か」についてのわれわれの認識は深まってゆく。

レクチャー（*2）

佐々木「絵本は子どもの空想遊びをどのように描いているか」

子どもの「空想遊び」（Imaginary play）の内的表象世界は、外側からは視覚的に見ることはできない。しかし、絵本作家のモーリス・センダックは、絵画による巧みなメタファー（Pictorial metaphor）を使い実際に鮮やかに子ども達の「ごっこ」の世界を描き出している。彼の『かいじゅうたちのいるところ』（富山房）を事例にして分析・考察を行った。

- 1) 遊び空間の所在→主人公マックスの部屋
 - 2) 空想遊びへの入り口→夕御飯抜きで寝室に放り込まれた
 - 3) 変換（見立て）の方法→ベッド（船）・絨毯（ブッショ）・ベッドカバー（王様のテント）その他
 - 4) 振りの成立条件→怪獣の王様になったつもりの動作・行為など
 - 5) 空想遊びの出口→おいしいにおい
- （ますなり・たかし／絵本学会運営委員、研究委員長）

「99 ポローニヤ国際絵本原画展」 ギャラリートーク

研究委員会で、どの様な研究企画が可能か、その模索を開始しました。手はじめに、この7月31日、板橋区立美術館学芸員の松岡希代子さんにお願いして「99イタリア・ポローニヤ国際絵本原画展」のギャラリートークを企画しました。12～13名の参加でしたが、大変に愉快で、そして貴重なお話を伺うことができました。説明があると、原画展もぐっと面白くなるようです。参加者には大変好評でした。ギャラリートークの性格上、あまり多数の参加は可能ではありませんが、今後もこのような企画を設けていきたいと思っています。本格的に企画ができましたら、絵本学会ニュースで会員全員にお知らせし、参加を募ります。今回は全会員にインホームーションが出せず（試行錯誤中でしたので）失礼しました。あしからず。（石井光恵／絵本学会運営委員）



向かって右が松岡希代子さん

街の絵本屋さん

●絵本専門店「ティール・グリーン」

久が原駅前商店街の喧噪を抜けた静かな街角に、緑に面してこちらまりと佇むティール・グリーンがある。少しレトロな感じのする木のドアを押し開けると、落ち着いた色調のインテリア、整然と並べられたカード、児童書、ここに出入りしているらしい子供たちの絵がいっせいに目に飛び込んでくる。店の奥にひっそりとしつらえた店主坂倉さんのデザインルームには、塾の行き帰りの子供たちがひょっこり人なつこい顔をのぞかせて、坂倉さんに甘えにくる。カード・児童書の専門店とはいえ、子供連れのお母さんだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、会社帰りの男性やOLさんが、ふと入り込んで、落ちつくような空気が、この店には充満していた。店主の坂倉さんと絵本との出会いは、今から10年ほど前にさかのぼる。当時、デザイナーとして、洋書絵本を収集していた彼女が『てぶくろ』に出逢ったのは、意外なことに友人に何気なく勧められとのことだったそうだ。ずっと前から、この本はあったのだろうに、こんな素敵なかつらことを知らずにいたなんて…と感じ、絵本に対する認識を変え、勉強してみたいと思うようになった。その後、ある大型書店の小さな児童書コーナーで、孫にプレゼントするための絵本が見つからずにため息をついているおばあさんを見かけたとき、もっと普通の街角に、普通の人が気軽にに入る絵本の店があったらと感じたのが、この店を開くきっかけになった。



久が原 ティール・グリーン

そんな想いが、2年半前にティール・グリーンとなった。店に置かれている本の一冊、カードの一枚が、坂倉さんのデザインルームの中で吟味され選び抜かれた物であることが、私にも伝わってくる。店へやってくるお客様との出会いの中から、坂倉さんの夢も広がってきた。「こういう企画があったら」「こんな事をやっている人がいるよ」という話が、普通の中から持ち込まれ、現在では、店が主催するおはなし会の他に、幼稚園を考える会、絵本サークル、作家さんによるサイン会、おもちゃを通して環境問題を考えるワークショップ、専門家による絵本講座など、時には店を飛び出しての

活動も盛んに行われるようになった。坂倉さんは、これらの活動が、児童館や公民館でなく、近所の本屋で行われるところに意味があるという。つまり参加者は、会の楽しさと、そこで扱われた絵本を持ち帰ることによって、家でもう一度感動を反復できるという点だ。(もちろん、坂倉さんの実益も兼ねるけど…)

こうした坂倉さんの取り組みの中で、店へくるお客様の、絵本に対する認識や購買意欲も徐々に高まっている。その親の姿は、必ず子供たちへ引き継がれ、読者層を育てるにつながるだろうと、坂倉さんは考えて、個々のお客さんに対応している。

「一冊の絵本が人の人生を変えることがある」その観点から坂倉さんはできるだけ多くの絵本に、子供に限らず多くの人が出逢って欲しいと言う。「例えば、子供の時、読んだ絵本を大人になってから読むと、また違ったメッセージを受け取ることもあるでしょ?また、どんな本がいいかしら?と悩むお母さんには、その人のお子さんの現在のレベルだけでなく、この先、この子ならこういう本が好きになるのではないかと感じる本を薦めることにしているんです。2~3カ月後、あの時は読まなかったけど、夢中になってます、なんてお返事があったときには、やったあって感じ。本屋冥利につきます!」と嬉しそうに語ってくれた。

読む側の立場に立って、絵本の世界へナビゲートしてくれる本屋さん。坂倉さんは、「みなさんが、こんな本屋さんが欲しいなって気持ちをここに持ち込んで、そういう形をつくってくれてるんです。また、子供が絵本に出逢うことで、疑似体験をし、時には怖い話を聞き、生きる知恵を身につけたり、夢を描くきっかけになってくれればと思います。」と語ってくれた。

取材を終えて、私の心に強く残ったのは、坂倉さんを中心にこの店に関わっている人たち、それぞれに絵本に感動した経験があり、それが原動力になっているということだ。こうして読者層に密着し、汗を流している、坂倉さんの絵本との関わり合い方が、まぶしく見えた。誰もが、「いいところ、みつけちゃった!」という気分になれる絵本屋さんだ。(取材・文責:ひらたてるこ)

ティール・グリーン

〒146-0084 東京都大田区南久が原2-16-16

TEL:03-5482-7871

FAX:03-5482-7872



店主・坂倉さん

●絵本のひろば ぼれぼれ

今、思えば私が絵本と出会ったのは、学生時代に先生が『しろいうさぎとくろいうさぎ』の絵本を見せてくださった時です。ウサギの表情がとっても可愛くて、心があつたかくなつたのを思い出します。絵本店によく行くようになったのですが、ゆっくりと絵本を見るということがどこのお店でもできませんでした。絵本を大人にも子どもにもゆっくりと見てもらえる、楽しんでもらえる絵本屋さんをつくりたいなあとずっとずつと思い続けてきました。そんな中で保育士をしていた頃、ハンディをもつた二人の子どもと出会いました。その後、家族ぐるみのお付き合いをするうちにこの子たちと居ることが楽しい、一緒に働きたい、一緒に絵本屋さんをするぞ!と思ったのです。この二人が航行年生になりそろそろ…と思った時、気がつくと、これまで三人で始めようと考えていたことが、あの子もこの子も来てほしい、一緒に夢を広げていきたいと思う仲間がたくさんいました。

私の思いを知って、気持ちよく土地を貸してくれた人、赤字を承知でお店を建ててくれた人、何の保障もないのに本の仕入れをさせてくれた人、オープンの日の朝までかかって本棚を作ってくれた人、看板を作ってくれた人…私のちいさな夢がいろいろな人の出会い、そしてたくさんの人の支えによって『絵本のひろば ぼれぼれ』ができました。たくさんの子どもたち、若いお母さん、お父さん、歳をとった人、ハンディをもつた人、いろいろな人が絵本を通じて出会い、ホッとできる空間をつくっていきたいと願っています。そして、何よりもそんな素敵な所に私が居たいと贅沢な想いでいます。手作りの小さなお店ですがちょっとのぞいてみてください。楽しみに待っています。



絵本屋さん「ぼれぼれ」。10畳ほどの広さのかわいらしいお店です。

☆「どんな絵本を見せたらいいですか?」「子どもがもう少し大きくなつてから…」とか「もう大きいから絵本はちょっと…」とか言われる方が多いのですが、私は、お母さん、お父さんが気に入った絵本が一番いいと思います。まず、大人が絵本を見てほしいですし、自分の感覚を感じたらいいと思います。絵本に年齢は関係ないのでないでしょうか。あつと思う絵本に出会ったときがいちばん大切で、幼いころに読んでもらった絵本は親子の絆を強くしてくれると思います。

☆毎週金曜日、お話し会(読み聞かせや人形劇、かるた….)をして

いますが最近は子どもたちが来ない日が多いです。大人たちが忙しくて連れて来れないのかな…?

☆出張お話し会を今後いっぱいしていきたいと思っています。同時に絵本販売もしますので、ぜひ、呼んで下さい。

☆「ぼれぼれ」とは、スワヒリ語で「ゆっくり」という意味です。お客様0の日も多く、現実はなかなかきびしいものがありますが、まあぼちぼちいきましょうかというところです。

場所は大阪市内からだと車で阪神高速11号池田線にのり、終点の木部で降りてから国道173号線を北に走って30分くらいのことになります。大阪市内からだと1時間と少しのところです。秋は紅葉がたいへん美しいところです。近くの川では毎年6月になるとホタルも乱舞します。(取材・吉田猛雄)

住所:〒563-0351 大阪府豊能郡能勢町栗栖 179-1

TEL. 0727-34-2421

営業:午前11時~午後5時30分

代表:寺本孝代さん



「ぼれぼれ」店内。(カーペットが敷かれていて座って本を見る事もできます)

伝 言 板

● Pinpoint Picture Books Competition 応募概要

応募内容

- ・応募資格 プロ、アマチュア問わず。

・応募規定

- ①原画をB3以内のクリアファイルに入れる。
- ②半立体、キャンバス、パネルなどクリアファイルに入らない原画は、作品をカラーコピー、プリント、写真、コンピューター出力などの方法で複製したものをB3以内のクリアファイルに入れ。
- ①②いずれの形式でもオリジナル、未発表のもの。文章を入れたダミー本(カラーコピーをホッチキスで閉じたもので可)を1部添付のこと。応募用紙に必須事項を記入の上コピーをファイルの上に糊付けする。応募用紙の原本は受け付けの際にお出しください。
- ・サイズ及び頁数
クリアファイルB3以内
タイトルページ1頁と本文5・7・11・15見開き(計11・15・23・31頁)いずれのスタイルでも可。

作品搬入 2000年4月24日(月)～4月26日(水)
参加費 1点 3,000円
審査員 小野明(絵本デザイナー)・絵本学会会員
澤田精一(福音館書店編集部)・絵本学会運営委員、
出版・編集委員長
松田素子(編集者)・絵本学会会員
西須由紀(Pinpoint Galleryオーナー)
発表 2000年5月10日までに本人に直接連絡
その他、作品搬入方法、作品返却、賞などについてお問い合わせください。
※申し込み・お問い合わせ先
ピンポイントギャラリー
〒107-0062 東京都港区南青山5-10-1 二葉ビルB1
TEL: 03-3409-8268 FAX: 03-3498-5978

●「色であそぼう!紙であそぼう!」

～「はらぺこあおむし」のエリック・カールさんと～

出版30年を迎える絵本『はらぺこあおむし』の作者であるエリック・カール氏を子どもの城にお迎えします。このワークショップでは、カール氏がペーパーに彩色するようすを見たり、カラーサークルの話から「色の体験」を分かち合うなど、子どもたち氏と色遊びをしながら、実際にコラージュ(貼り絵)を楽しめます。

日時: 2000年1月30日(日) 10:00～12:30

・当日のスケジュール

9:30～10:00 受付

前半 カールさんのおはなしと色遊び

カールさんのペーパー作りデモンストレーション

後半 コラージュ・ワークショップ

発表会・記念写真

会場: 子どもの城9階研修室 902～4号室

対象: 小学校1～6年生 50人(はがきによる抽選)

参加費: 3500円(入館料、材料費込み)

主催: 子どもの城(財団法人児童育成協会)

協力: 偕成社

後援: 絵本学会、JBBY

申込方法:

参加希望のお子さん(小1～6)は次の事項を記入し、往復はがきで下記までご応募ください。当選の場合にはそのまま正式な申込書となりますので、間違いのないようお願いします。

(1) 参加する子どもの氏名とふりがな (2) 年齢 (3) 学校名・学年 (4) 性別 (5) 住所(電話番号) (7) 保護者名 (8) カールさんの絵本でいちばん好きなもの (9) 絵本学会の会員であることを明記して下さい。

宛先: 150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1

子どもの城企画研修部「色であそぼう」係

締切: 1999年12月末日(当日消印有効)

通知: 当選、落選とも返信用はがきでお知らせします。

見学希望の方は事前に子どもの城まで申し込んでください。

〈定員60名〉

お問合せ: 03-3797-5665

子どもの城企画研修部(担当: 土肥)

●「絵本と遊ぼー目と手・楽しむ絵本集」発行

「絵本と遊ぼー目と手・楽しむ絵本集」(選=中川素子)(「別冊太陽」日本のこころ10号)がこの12月10日に発行されました。「びっくり仰天 しあげ」、「ぬって描いて 色と形」、「読むのかな見るのかな 文字」、「よく見てごらん 視覚」「いい感じ この感じ 素材と技法」の5項目で本を選び、カラー写真をぜいたくに使い、珍しい絵本もいくつかとりあげた本です。会員の方にも何人が執筆していただき、また若い会員の手づくり絵本の写真ものっています。是非ご覧下さいませ。(中川素子)

●ロシア児童文学・児童文化研究会の雑誌「カスチョール」(たきび)17号発行のお知らせ

「絵本学会ニュース」(No.6)〈伝言板〉に紹介がのった「カスチョール」誌17号が11月1日 やっと発行されました。今号はロシアの詩人A.ブーシキン生誕200年特集号。「ロシアで出版された子どものためのブーシキン作品」、「T.マーヴリナとブーシキン」等、ロシアの第1人者の書き下ろし論文、資料などあり。今号は部数が少なく残部は44冊。欲しい方は下記に連絡を。(「カスチョール」誌には毎号ロシアの画家の絵はがきの付録あり。今号は19世紀画家S.マリューチンの「サルタン王のおはなし」から。)

連絡先 〒612-0029

京都市伏見区深草西浦町1-10-3-403号

「カスチョールの会」

Tel・Fax 075-643-3246-①4240-②

2000年1月1日からは①がTel、②がTel・Fax

Fax専用は075-643-3276

「カスチョール」のホームページ

<http://www.terra.dti.ne.jp/rarara/index1.htm>

(田中素子 大阪外国語大学教授)

●写真絵本『となりのしげちゃん』

写真・文 星川ひろ子 小学館 定価1,470円(星川ひろ子)

この度「しょうがいって なあに?」シリーズの三作目として『となりのしげちゃん』を出版することになりました。この写真絵本を作

となりのしげちゃん



「しげちゃんが、はじめてあたしの名前をよんだ！」

ダウン症の幼児と少女との出会い。保育園の中で、

ゆっくり成長していくしげちゃんの1年間を追った写真絵本。

写真・文 星川ひろ子 小学館 定価1,470円 本体1,400円



「となりのしげちゃん」

丈夫という社会の選択肢のないままに、出生前診断が一つの方向性を持つてしまうのではないかという不安からでした。それは命に優劣をつけ、人工淘汰してしまうことへの不安もあります。新しい命は、それぞれの使命をもって誕生します。たとえ、重い障害が有っても、掛け替えの無いものだと思います。この当たり前のことが、医学の進歩とともに置き忘れられそうなのです。二十一世紀を生きるこどもたちに、何とかそのことを伝えなくてはなりません。このシリーズで私は、障害そのものを描くのではなく、それぞれの生涯のひとときを描きたいと思っています。写真絵本というあまり知られていないジャンルではありますが、主人公たちが実在するというリアリティは、温かさや豊かさとなって伝わってくれることと自負しています。

障害に対する人々の意識を大きく変えることはなかなか難しいことです、針の穴でもいいから、風通しが良くなるよう、開けてきたいのです。少しでも多くの方に読んでいただけるよう、お力添えよろしくお願ひ申し上げます。

●夏目康子著『マザーグースと絵本の世界』

岩崎美術社 1999年11月発行 4,700円



「マザーグースと絵本の世界」

『マザーグースと絵本の世界』は、ナンセンスであったり、無気味であったり、不思議であったりするマザーグースを、英米の絵本がどのように描いてきたかをたどった本です。第Ⅰ部では、「ロンドン橋」や「ハンプティ・ダンプティ」や「ジャックとジル」などの有名なマザーグースの唄が、18世紀の素朴な児童書、19世紀のチャップブック、ヴィクトリア朝の豪華な絵本、そして20世紀絵本のなかでどのように描かれたかを検証しています。第Ⅱ部では、18世紀から20世紀にわたるイギリスの歴史、文化的な側面から、子供のための本が成立していく過程をたどっています。絵本におけるテーマのとらえ方、技法、印刷技術、対象とした読者などの変遷についても知ることができます、絵本の歴史書として読むこともできます。大英図書館に一冊だけ所蔵されている貴重な18世紀の文献から現代の絵本にいたるまで網羅し、資料的な価値も見のがせません。また、同じマザーグースの唄を、挿し絵画家や時代によってどのように解釈しているかという比較も興味深いものがあります。カラー図版のページには、さまざまな絵本の図版が100点余り収録され、本文中には白黒図版が約200点収録されています。美しい図版を楽しみながら、絵本の変遷について知ることのできる本です。(夏目康子)

●安曇野ちひろ美術館

《ちひろの春》

《BIB 絵本原画展》

出品予定作家：イブ・スパン・オルセン、ビネット・シュレーダー、ユゼフ・ヴィルコン、レオ・レオニ、チャールズ・キーピング、ドュシャン・カーライ、クラウス・エンツィカート、ニキータ・チャールトン他
《絵本の歴史》

会期：2000.3.2 (木) ~ 4.25(火)

【会館】9:00 ~ 17:00

【休館日】水曜日（祝日は開館、翌日休館）、冬期休館

1999.12.1 ~ 2000.2月末日

【入館料】大人800円、中高生500円、小学生300円

※団体（20名以上）、障害者手帳をお持ちの方とその介添えの方、65歳以上の方は100円引き

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL. 0261-62-0777

●ちひろ美術館

《印象派のレンズ 茂田井武展》

会期：1999.10.7 (木) ~ 2000.1.16 (日)

素朴な詩情、あたたかいユーモアとやわらかなかなしみ--。

茂田井武の残した絵の前に立つと、誰もが抱えもつ幼年時代の記憶や、どこかで出会った大切な風景が胸によみがえります。茂田井は卓越した記憶力をもち、自身だけが持ち得た「印象のレンズ」を通して、夢や無意識の世界をも紙の上に焼き付けました。

本展では、二十代のとき鞄一つでパリに渡った茂田井の“放浪者時代”的画帳から、最晩年に病床で描かれた絵雑誌『キンダーブック』や『セロひきのゴーシュ』の原画まで、約七十点を展覧し、茂田井武の物語る絵の魅力を紹介します。



すてんぐらす 1954年『キンダーブック』1954年11月号

同時開催《ちひろの少年--今を生きていく男たちへ。--》

この展示は、働く男の人たち、とくにサラリーマンにぜひ観ていただきたいのです。仕事、会社のアレコレがスッと失くなると思います。きっと思い当たる少年が、ここにいます。どうか、ご主人や力レをひっぱって、美術館に足を運んでください。

《1990年代の日本の絵本展》

会期：2000.2.11（金）～4.16（日）

総じて、日本の絵本における1990年代は、経済のほぼ絶頂期であるバブル景気の真只中にはじまり、その急激な崩壊と共に進んだ。

新しいメディアと共に存し、相互に触発し合いながら、絵本という独自の表現をどう捕えていくのか。絵本で、何を表現していこうとするのか？何を語るのか？振り返れば、それが、大きく問われた90年代だったかもしれない。

今回、90年代の日本の絵本を代表する22人の画家、100展の絵本原画を紹介する。個性豊かな表現を駆使した絵本たちは、それぞれに、人が人として生きていく上の優しさや、強さ、しなやかさ、賢さ、夢や想像、時に辛さや悲しみを語っている。そこからは、来る21世紀に向けた、絵本と子どもたちの未来へ送るメッセージを受けとることができるように思える。

出品予定作家：いわむらかずお、太田大八、片山健、瀬川康男、田島征彦・征三、長新太 他

【会館】9:00～17:00（金曜日は19:00まで）

【休館日】月曜日（祝日は開館、翌日休館）、

1999.12.28～2000.1.4 a.m

【入館料】大人500円、中高生200円、小学生100円

※団体（20名以上）、障害者手帳をお持ちの方とその介添えの方、65歳以上の方は2割引き

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL. 03-3995-0280



太田大八 「ひなたぼっこかめさん」より（童心社）1992年

●大島町絵本館

・ギャラリー

《関口コオ 絵本原画展》

～抒情あふれる切り絵の世界～

1999.12.1～2000.1.27

《池谷陽子 絵本原画展》

～素朴であたたかみのある布絵本の世界～

2000.1.29～3.30

・カフェギャラリー

《第6回全国手づくり絵本コンクール入賞作品展&出版記念絵本原画展》

1999.12.1～12.26

《年賀状展》

2000.1.5～1.16

《島田朋子ビンドール展》

2000.1.18～1.27

《大島町芸術文化協会 絵画展》

2000.1.29～2.13

《山田文子グループ展》

2000.2.15～2.27

《川原和美小品展》

2000.3.1～3.15

《長根尾幸子メルヘン展&絵本教室受講生の絵本展》

2000.3.16～3.30

・シアター

《語りの会&エンジェルスの交流会》

2000.1.29 14時～

《童謡唱歌ファンタジーコンサートア》

2000.2.12 14時～

出演 女声合唱団「ヴォーチェ・フォンターナ」

《おおしま絵本のつどい》

2000.3.25

特別創作教室「のっぽさんといっしょ！できるかな」

指導 造形作家 枝常弘

ゲスト のっぽさんこと 高見映

【開館】10:00～18:00

【休館日】月曜日（祝日の場合は翌日）、月1回整理日

〒939-0283 富山県射水郡大島町鳥取50

TEL : 0766-52-6780

FAX : 0766-52-6777

●軽井沢絵本の森美術館

《絵本の中のおひめさま展～その性格にみる女性たちの描かれ方～》

会期：1999.10.15（金）～2000.1.17（月）

世の中にはおひめさまの登場する物語が数多くあり、彼女たちの性格、そしてストーリーの行方もさまざまです。きらびやかな印象の強いおひめさまは物語の中でいかに生き、どのような役割を担っているのでしょうか。また女性であるがゆえに押しつけられた姫独自の性格というものは存在するのでしょうか。

本展ではこの単純明快かつ奥の深い「おひめさま」、そして女性の描かれ方をイラストレーションとともにご紹介します。

2000年春の企画展《えほんのひみつ展—子どもも大人も新たな発見！》

会期：2000.3.2（木）～4.24（月）

「絵本」は文章と絵で構成された本です。絵本作家は絵本の中で様々な手法を用いて、より効果的な表現を試みます。それらの表現は文章に少しの挿絵の入った「本」とは明らかに異なる効果を生み、読み手の想像力を刺激し、先へ先へと読み進める欲求を促します。今展では、色々な手法を絵本の「ひみつ」と捉え、それをもとに展示作品を分類することで、これまでとは少し違った絵本の見方を提案したいと考えます。

【開館】9:00～17:00

（最終入館は閉館の10分前、12・1月は10:00～16:00）

【休館日】火曜日、1999.12.26～2000.1.1

【入館料】大人 800円 中高生 500円 小学生 400円

エルツおもちゃ博物館との共通割引セット券：大人 900円 中高生 700円 小学生 500円

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢 182-1

TEL : 0267-48-3340 FAX : 0267-48-2006

●エルツおもちゃ博物館

《おもちゃのクリスマス展～讃美歌と祈りの妙なるしらべ～》

会期：1999.10.15（金）～2000.1.17（月）

本展では、長い歴史をもつ聖歌隊と協会のおもちゃを中心に、ドイツのクリスマス風景を展示します。また、「アドヴェンツカレンダー」「もみの木」「サンタクロース」など、クリスマスのキーワードとともに、ドイツ人のクリスマスを待ちわびる思い、憧れをご紹介します。

【開館】9:00～17:00（最終入館は閉館の10分前）

【休館日】火曜日、1999.12.26～2000.1.1

【入館料】大人 400円 中高生 300円 小学生 200円 軽井沢絵本の森美術館との共通割引セット券：大人 900円 中高生 700円 小学生 500円

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢 182-1

TEL : 0267-48-3340 FAX : 0267-48-2006

●いわむらかずお絵本の丘美術館

《写真展／いわむらかずお絵本原画展》

～里のくらしと生きものたち・キツネ～

開催中～2000.2.13

里のくらしと生きものたちを、やさしいまなざしでみつめる獣医で写真家の竹田津美と、絵本作家のいわむらかずおの2人展。

【開館】10:00～17:00

【休館日】月曜日

（祝祭日の場合は開館、翌火曜日休館、1月3日開館）

年末休館 1999.12.13～31 ※元旦から開館

【入館料】大人 900円 小中生 700円 小学生 500円 幼児 300円

〒324-0611 栃木県那須郡馬頭町大字小砂 3097

TEL : 0287-92-5514 FAX : 0287-92-1818



いわむらかずお絵本原画展「14ひきのあきまつり」童心社刊から

●木城えほんの郷

《クリスマスの絵本原画展》1999.11.13～12.26

「クリスマスの三つのおりもの」セット 林明子さく

「クリスマス・イブのおはなし」セット 長尾玲子さく

「もりのおりもの」セット たるいしまこ・さく

「サンタクロースってほんとにいるの？」 すぎうらはんも絵

「サンタさんからきてがみ」たるいしまこ絵

ユニセフのクリスマスカード ウーラ・バヤカリオ絵(フィンランド)

《常設コレクション展》2000.01.2～2.20

《おどりトラ・チョン・スクヒャンの世界》2000.2.26～4.9

韓国の昔話で、再話は金森襄作さん、絵は奥様のチョン・スクヒャンさんが李朝民画系の手法で描いています。この絵本が世に出るまでには長い道のりがありました。

【入館料】大人 500円 子ども 300円 町内どちらも 300円

宮崎県児湯郡木城町石河内

TEL : 0983-39-1141

●佐賀市立図書館

JBBY日本国際児童図書評議会 全国巡回絵本展

「ハロー・ディア・エヌミー！」

～平和と寛容をテーマにした国際絵本展～

会期：2000.3.20～3.27

【入館料】無料

〒840-0815 佐賀市天神 3-2-15

TEL : 0952-40-0001 FAX : 0952-40-0111

●竹下夢二美術館

《竹下夢二「美人画の世界」展》

～美と愛への憧れと〈夢二式美人〉を描いて～

2000.1.4～3.28

竹下夢二が描く女性絵は、〈夢二式美人〉と称され、その独特な美人画のスタイルは、夢二と大正ロマンを象徴する画として、今なお多くの人を魅了しています。

しかし一口に〈夢二式美人〉と称しても、作品の技法また制作した年代によって、様々な表現が試みられ、さらにモデルとなった夢二の恋人や周辺の女性たちの存在、また理想の女性像も作品に影響を与えました。

この展覧会では日本画を中心に、スケッチ・版画・デザイン作品等にみられる美人画300点を出品し、美と愛への憧れを多彩に表現した夢二による美人画の世界を紹介していきます。

※ギャラリートーク 2月13日15:00より、本企画担当学芸員によるギャラリートークを予定しております。

【開館】10:00～17:00

【休館日】月曜日（※3月20日開館、翌3月21日休館）

【入館料】一般 700円・大高生 600円・中小学生 400円

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-2

TEL : 03-5689-0462 FAX : 03-3812-0699

●弥生美術館

《御正伸展》

～挿絵原画と、油絵に見る幻想世界～

2000.1.4～3.28

御正伸は洋画を学ぶことからスタートした画家で、後に日展・光風会・三軌会を活躍の場として大作を発表し続けました。しかし一般に御正伸の名は、洋画よりはむしろ新聞・雑誌等の挿絵でよく知られています。

御正伸は大正3年、日本橋に生まれ、昭和55年67歳で逝去しました。本展は、その御正伸の珍しい初期の油絵や日展初入選作品、絶筆の大作の他、初公開の挿絵原画やスケッチ帳など、約300点で構成する、初めての本格的大回顧展です。

戦後の挿絵黄金時代の作品と、油絵を通して追及された御正伸の世界をあわせてお楽しみください。

※ギャラリートーク 2月13日14:00より、本企画展担当学芸員によるギャラリートークを予定しております。

【開館】10:00～17:00

【休館日】月曜日（※3月20日開館、翌3月21日休館）

【入館料】一般 700円・大高生 600円・中小学生 400円

【交通】地下鉄千代田線 根津駅下車徒歩7分・地下鉄南北線 東大前駅下車徒歩7分・JR上野駅 公園口より徒歩20分・東京大学弥生門斜め前※館の入口は竹下夢二美術館と共通になっています。

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-3

TEL: 03-3812-0012 FAX: 03-3812-0699

●斑尾高原絵本美術館

《ヨーロッパの現代絵本展》

開催中～2000.1.10

ピーターラビットやくまのプーさんなど、今もなお人気の高い絵本が登場したイギリスを始め、ヨーロッパ諸国には数多くの注目される現代絵本作家がいます。また近年では、東欧諸国の作家も注目を集めています。

本展では、原画を始め、人気の高い絵本も数多く揃えました。またクリスマスに向けて、クリスマスをテーマにした絵本、アドベントカレンダー、プーさんやミッフィーなどのキャラクター絵本も大集めて展示の予定です。



「Zappa the clown」©1996 アンドレ・ダーハン

【開館時間】9:30～18:00

【休館日】火曜日 ※ただし1月4日は開館、翌日休

【入館料】700円（飲物付）※幼児無料

〒389-2257 長野県飯山市斑尾高原 11492-224

TEL: 0269-64-2807

●ペイネ美術館

《収蔵品展》

2000.1.1～3.24

フランスの画家レイモン・ペイネの作品を当館所蔵品により展示。原画作品を中心に、リトグラフ、ポスター、画材など約60点で構成。冬から春への季節感ある作品を選び、ご覧いただけます。



©ADAGP / PARIS · SSPADA / TOKYO 1999

【開館】10:00～16:00

【休館日】火・水・木曜日

（3月から無休）

【入館料】大人 900円・小中生 500円

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢湖217

TEL: 0267-46-6161

●ワイルドスミス美術館

《ふたつの夢》

開催中～2000.2.2

ワイルドスミスが「夢」をテーマに描いたふたつの作品「わたしのメリーゴーランド」(1988年)、「夢の国のちびっこバク」(1996年)を紹介。両作品とも「夢」の素晴らしさを伝えています。新たな年の幕開けにふさわしい展示です。

【開館】9:00～17:00（最終入館 16:30）

【休館日】水曜日（年末年始・祝日は開館）

【入館料】一般 700円・小学生 500円

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原9-101

TEL: 0557-51-7330

（株）エム・エム巡回企画展覧会

《東欧絵本の世界展》

東欧は、世界の絵本界のひとつの中心地。

この展覧会では、現代の東欧を代表する作家たちによる絵本原画を中心、約200点の作品が日本で初めて公開される。

高浜市かわら美術館 2000.4.22～5.28

栃尾市美術館 2000.7.22～9.3

和歌山県立近代美術館 2000.9.19～10.22

北海道立帯広美術館 2000.12.8～2001.1.24

《飛鳥童の世界 地球の詩展》

地球に育まれる生命を、その独特的なイマジネーションの世界に表現するカナダ在住の作家、飛鳥童(1944年)。日本のみならずカナダ、アメリカでも多数の絵本を手がけライブチヒ国際図書展荣誉賞、テ

ヘラン国際ビエンナーレ・グランプリなど数々の国際賞を受賞。出展作品約120点。

高松三越店 1999.12.21～12.26

大坂三越店 2000.1.3～1.10

東京丸大ミュージアム 2000.7.27～8.8

札幌三越店 2000.8.15～8.22

刈谷市美術館 2000.11.30～12.17(予定)



「ワンダフルライフ 地球の詩」より ©Warabé Aska 1991

事務局からのお知らせ

●役員改選に伴う運営委員、監事候補の推薦について

先の1999年度絵本学会総会において、運営委員選出規則、監事選出規則が正式に制定されました。これに伴い、来年度改選を控えた運営委員、監事の候補者の推薦を受け付けます。自薦、他薦による候補者を葉書または書面により1月31日（消印有効）までに絵本学会事務局にお届けください。

絵本学会役員改選のための日程は、以下の通りです。

[絵本学会役員改選のための日程]

1・運営委員・監事の公募 12月下旬発行のニュースで公示
自薦、推薦による 締め切り 1月末日

2・選挙管理委員会の設置

3・運営委員・監事の選挙 郵送による選挙 2月中旬発送
(運営委員10名以内、監事2名) 2月末日必着

4・理事会による運営委員・監事候補の確定

5・理事候補の選出 運営委員(候補)の選挙により5名選出

6・会長候補の選出 理事(候補)の互選により会長(候補)を選出

7・会長(候補)による2名以内の理事候補推薦

8・会長(候補)による4名以内の運営委員推薦

9・会長、理事、運営委員の承認 6月定期総会

*2000年6月の定期総会までは、現会長・理事・運営委員が業務を執行

●監事選出規則

1. 監事は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。

2. 監事候補は、改選の1ヶ月以上前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、2名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された監事は、総会の承認を得て決定する。

●運営委員選出規則

1. 運営委員10名は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。会長は選出された理事の推薦を得て、選挙にかかわりなくさらに4名以内の運営委員を任命することができる。

2. 運営委員候補は、改選の1ヶ月以上前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、10名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された運営委員は、総会の承認を得て決定する。

●第3回絵本学会大会について

第3回絵本学会大会は、佐賀県伊万里市民図書館で開催することを前提に現在調整しております。日程、内容なども確定しておりませんので、決まり次第お知らせいたします。

●理事会・運営委員会

10月2日 理事会・運営委員会 於：武蔵野美大吉祥寺校会議室
議題

・次会絵本学会大会について

次会大会を関西で開催することを検討。

・会長交代に伴う運営委員会の構成員の変更について

・次期役員の改選について

日程、手続きなどを検討。

・研究紀要投稿論文について

査読委員が決められ査読を依頼。

・学会機関誌の発行について

・運営委員の追加について

藤本朝巳氏が運営委員に加わることが了承された。

・その他

10月23日 運営委員会 於：日本女子大学会議室
議題

・次会絵本学会大会について

・研究紀要の進捗状況について

委員による査読の結果が報告されたが、研究紀要『絵本学』の性格について意見を交換、研究分野の方向性を明確にし第1号の基準を必ずしも踏襲しないことが確認された。その結果、それぞれの論文掲載の採否については次回運営委員会まで持ち越された。

・機関誌の刊行について

・次期役員の改選に伴う選挙管理員について

・今後の活動計画について

11月27日 運営委員会 於：武蔵野美術大学吉祥寺校会議室
議題

・次会絵本学会大会について

佐賀県伊万里市民図書館より大会開催の要請があり、開催することを前提に諸条件の調整を行うことになった。

・研究紀要論文について

委員より査読の結果が報告され、掲載の採否を決定、了承された。

・機関誌の刊行について

2000年5月をめどにプレ創刊のための準備に入ることが確認された。